

第四章 学問と野心

四国は西讀の片田舎の少年にとつて、東京への遊学は、現在の学生たちにとつてのアメリカ留学よりも遙かに大きな夢であつたにちがいない。東京は憧れの都であり、世界への窓であつた。正芳は高松高商入学以来、何度が東京を訪れ、この都市の活力と可能性に魅せられて、親しい友人に「東京は生き甲斐のあるまちだ」と語っていたが、いまその夢が満たされ、東京の住人の一人となつた。昭和八年（一九三三年）、正芳二十三歳の春のことである。

正芳は、大学入学後わずかの間、杉並区阿佐ヶ谷二ノ五百六十二、立島方に寄寓したのち、東京商科大学（現在の二橋大学）の所在する国立に近い府下国分寺三百二十四の岡村熊太郎方に下宿した。人の紹介で近くの家の中学五年生（木村政太郎）に英語を教えた。二つの奨学資金とアルバイトからの収入、そして、時には、故郷の兄からの送金があつた。決して楽とは言えなかつたが、学生としての生活基盤はほぼこれで固まつた。

「二橋はすでに、都心の神田から国立に、予科は石神井から小平に移転していた。そのころの武蔵野には、国木田独歩の作品にみるようなおもかげが、なお色濃く残っており、武蔵野と 商科大学 との組み合わせには、ややちぐはぐなものがあつた。

講義の半ばで、芋掘りに出かけたことも再三であつたし、秋から冬にかけては、落葉の散りしきるキャンパスの周辺は、ことのほか寂しかった。それに、映画をみるには新宿まで出かけなければならなかつたし、古本をあさるには神田へ行かねばならず、ボートをこぐには隅田川というふうに、往復の電車賃さえとばしい学生のふところには、相当こたえたものである。」（『私の履歴書』）

正芳より一年前に、高松高商から商大に入学していた長尾頼隆（のち鉄道弘済会理事）の思い出話はこうである。

「私は吉祥寺に住んでいましたが、よく往ったり来たりしていました。大平君が身体に似合わず小さい机で勉強してあるところへも度々遊びに行きました。」

また、多摩川ベリに出かけたり、春になると小金井の桜を見に行ったり、秋は栗ひろいに行ったりしました。府中にある大國魂神社に行ったことがあります。ここは、夜、真暗な中で、誰に何をいたずらしてもいいという祭があるということで、一緒に行こうと出かけたのですが、二人とも期待したほどでもない、と言いながら帰った覚えがあります。」

一橋大学（当時は東京商科大学）の濫觴は、明治八年（一八七五年）、森有礼によって創立された商法講習所にあるとされ、同校はわが国の近代化に大きな役割を果たした。

だが、一橋の歴史は、決して坦々としたものではなかった。明治十八年に文部省所管の国立校となるまでは、その所管が次々と変化し、一度は経営難のため廃校の決議が行われたこともあった。国立移管後も数回の危機があり、一橋は全校をあげてこれを取り切ってきた。その危機の一つは、正芳の入学する二年前にも生じた。若槻礼次郎民政党内閣の緊縮政策によって伝統のある予科と専門部が廃止されようとしたのである。学生はこれに強く抵抗し、最後の手段として籠城戦術に訴え、これを弾圧する警官との間に乱闘が行われて負傷者多数を出したが、先輩などの工作により政府が方針を撤回した。

同校は、教授相互間、教授と学生間の調和がよくとれた学園だと評されてきたが、それは花岡弥六（昭和四年卒、現電気化学工業会長）によれば、「明治以来のこのような度重なる圧迫が、内都の結束を固める力となったため」という。

正芳が二年のとき佐藤弘教授（故人）のプロゼミナールで一緒に勉強した川口勲（のち三井アルミニウム社長）は、この予科廃止反対運動の籠城組の一人である。

「私が昭和六年に予科に入ったときには、新入生が二百十四人、それに加えて、上から落ちてきたのが六十人いて、教室

に入り切れないほどでした。それから、籠城事件がはじまり、警察がトラックで石神井の予科にきて、一度に五、六十人が警察のプタ箱へプチこまれるというような有様でした。結局、警察へひっぱられたり、落第したりで、昭和八年に本科へ進んだのが九十九名だけだったのですから、このときの動揺の大きさがわかります。」

さらに、昭和八年の一月には、マルクス経済学の泰斗、大塚金之助教授が第五次共産党事件連座の嫌疑により、警視庁特高課員に逮捕された。シンパに過ぎなかった学生も檢舉されて退学処分を受け、唯物論研究会の少壮教授の中からも検束されるものが出るという有様だった。

大平の二年先輩の友人田中与作（のち日本鋼管取締役）は、「昭和八年から十一年にかけては、激動と混乱の時期で、学生は勉強を一生懸命やるグループと、もっぱら遊ぶグループの二つに分かれた」と語っている。正芳は、おそらく前者だったであろう。

「必修課目のほか、私は杉村広蔵先生の経済哲学、山内得立先生の哲学史、三浦新七先生の文明史、牧野英一先生の法律思想史など、手当り次第に、欲張って受講することにした。私にとっては、いずれもが難解であったが、受講したおかげで、思想史、とりわけ経済の思想史に若干の興味を覚えるようになった。」（『私の履歴書』）

大平は後年（昭和三十八年）、杉村教授への追想文を草したが、その中に、次のように書いている。

「……私は杉村先生の『経済哲学』の講筵に侍っていたのですが、実のところ、当時の私の能力を以てしては、その講義を十分理解することができなかつたわけです。しかし私はその判らない難渋な講義の中に、不思議にも私を魅了するに足るあるものを感得したのでした。そのあるものの本体は、その当時、どうもハッキリしなかつたのです。私は、卒業後も、そして先生の歿後においても、終始、杉村先生の著述を、繰返し繰返し読んでまいりました。そのうち逐次先生の思想に親しむ傍ら、経済はもとより、人間に対し、社会に対し、私の眼識が拓かれて来たように思われます。私は講筵で先生のけいがい接する以上に、先生との間にパーソナルな接触に恵まれませんでした。先生は私にとっては大切な恩師になられました。」

資本主義と社会主義に対する見方、貨幣に対する考え方、生産と貯蓄と投資の機能とその限界、経済性の理念の指向するもの、ひいてはその前提にうかがふ文化価値というものの等々の精神と構造への理解に接近することができたことは大きな開眼であったと思いますが、更には歴史に対する考え方、人生のモチーフに対する反省というようなものが恵まれたことも、大きい喜びでありました。尚先生は大学は方法論を生命とし、従って大学生はその方法論を体得しなければ大学に学んだね、うちがないのだという意味のことをよく言われました。このことは私の大学におけるデンケンの修業に、大きい刺戟となり又導きの星となりました。」(『YMCA』昭和三十八年八月十日)

こうして大平は、晩年まで、杉村教授の著書を身辺から離すことがなかった。さらにもう一つ、正芳の心を動かした講義があった。

「中山伊知郎助教授も、杉村先生と並んで学生の間人気があった。恩師シュンペーターの流れを汲む新進の学究で、われわれは先生から経済原理の講義をきくことができた。やがてその内容は、常に変動する経済現象を観察する時、最も特質的なことはその相互の依存関係であり、経済理論の基本部分は、均衡理論のあらゆる形態からなるものであるから、経済学とは均衡理論で貫かれた一体系である」という立場をとられ、それが純粹経済学として結実したのである。」(『私の履歴書』)

「思想史、とりわけ経済の思想史に若干の興味を覚え」ていた正芳は、大学二年に進学すると、上田辰之助教授の本ゼミナールに参加することとした。

「上田先生は、経済学者というよりも、むしろ社会学者であり、社会学者である前に実のところ言語学者であられた。したがって、先生のトマス・アクィナスの研究その他のお仕事も、その言語学的な素養を抜きにしては考えられないものであった。

ゼミナールは、たいてい吉祥寺の先生のお宅で行われた。R・H・トニーの『獲得社会』をテキストとして、彼の経

濟思想をというよりは、トニーの英文自体の言語社会的な解明を教わった。……私は先生から、きびしいしこきを通して言葉を大切にすることを教えられた。」(同前)

同期の武野義治(のちブルガリア大使)は、「上田ゼミは、学生をセレクトして、英語に堪能なものでなければ入れませんでした。同期で上田ゼミに入ったのは、大平さんとたしかもう一人だけだったと思います。ですから、大平さんの英語は非常によい成績だったでしょう。私は、上田先生が『語学というものは、how to sayではなくて、what to sayだ』と言われたのを覚えています」と語っている。

大平正芳がのちに、政治家としては珍しく豊富な語彙を駆使し、独自の説得性とリズムを持つ文章を書いたことは、人の等しく指摘するところだが、この能力は、上田ゼミで大いに磨かれたものであったにちがいない。

このようにして、正芳は、杉村教授からは歴史と哲学の方法論を学び、中山助教授からは経済学の基本を学び、そして、上田教授からはこれらの思想構築の根幹となる言語について学んだ。そのいずれもが、大平正芳という人物を形成する重要な要素であった。

商法講習所時代から算えれば、今日まで百年余、一橋大学は、キャプテン・オブ・インダストリーの旗印のもとに、多くのすぐれた人材を実業界に送り出したが、政界、官界、学界、教育界等に進んで功績をあげた人も少なくなかった。そして、定員の少ない単科大学であっただけに同窓の結びつきは堅く、同期生でなくても助け合っのがこの大学のよき伝統となっている。

大平は、「私はそのファミリーに仲間入りを許されたばかりに、どれだけ助かったかわからない」と書いているが、事実、後年政界に出た彼は、一橋ファミリーから少なからざる支援を受けたのであった。

その重要な一人が、明治四十三年(一九一〇年)卒業の加藤藤太郎であろう。もっとも、加藤は、香川県立三豊中学校の第二回の卒業生で、正芳にとっては中学の先輩にも当る。加藤は、東京高等商業学校(一橋大学の前身)卒業後、王子

製紙に入社、終戦時には副社長であったが、GHQの追放にあい王子を退いた。追放が解除されるや、廃墟となっていた王子製紙神崎工場を再建し、神崎製紙を創立して、その初代社長（現相談役）となった。

大平は、「学生時代から、……日比谷の三信ビルにあった王子製紙に加藤先輩を訪ね、学生県人会の寄付などをたびたびお願いし、いつも予期以上の協力を受けた。」（『私の履歴書』）と書いている。

高松高商から昭和十年入学組の鷹尾寛（のち新日本証券会長）は次のように回想する。

「ぼくは大平さんの二年後輩でした。入学した年の夏休み、帰省しているとき、大平さんがやってきて、これから加藤さんのところへ行こう」と言っんです。加藤さんもまたま郷里の豊中町（観音寺市の北側に隣接する）に帰っていたんですな。そのときはただご馳走になっただけでしたが、その夏休みの終わりに大平さんに連絡したら、自分も一緒に上京すると言う。大平さんと高松の棧橋で待ち合わせていたら、加藤さんが、つかつかと前を通って連絡船の方へ行くんですね。そこで二人が加藤さんを追いかけて、声をかけました。」

このときの上り東京行の列車は込んでいて坐る席がない。正芳と鷹尾は、通路に新聞紙を敷いて腰をおろし、お互いに本を読んでいた。すると、加藤が一等寝台からやってきて、「食堂車に行こう」と誘った。

「こういいう時でもなければ栄養補給はできないんだから、思い切って何でも食え」という仰せで、二人が一生懸命飲んだり食ったりしているうちに、加藤は、十円札をボンと置いて一等寝台の方へ行ってしまった。勘定を頼むと、支払いよりお釣りの方がずっと多い。「これは、おれたちをテストしておられるんだから、返しに行こうや」と正芳が言う。鷹尾はお釣りを持って、正芳のあとを一等寝台まで歩いた。

正芳がノックして、「大変ご馳走になりました。お釣りを持って参上しました」と言いながら中へ入ると、加藤は、「何だ気の小さいやつらだな。東京へ行くまで十七時間、これからまだ何回もメシを食わにゃならんじゃないか、二人揃ってそれをまた持つてくるというバカがあるか」と叱った。

「二人は、叱られながら、加藤さんが郷里の若者を心から可愛がる眼差しを強く感じました」と鷹尾は語った。

この車中の話は、加藤が王子製紙の経理担当常務だった当時のことである。

正芳は学生時代に、いくたびもこの加藤に接して敬慕の念を強め、また加藤は正芳の人柄を愛し、さながら親子のような関係に入っていく。

大学へ入学して以後も、正芳のキリスト教への関心は継続し、もっぱら聖書を通じて、信仰を深めようとした。『私の履歴書』によれば、大阪時代から矢内原忠雄の著作には特に傾倒しており、自由ヶ丘の矢内原邸を訪ねて「聖書研究会」に参加した（ただし、矢内原忠雄夫人、ならびにその頃、同研究会に参加していた人々は、正芳の参加を記憶していない）。

また、世田谷区東松原の自宅で聖書の講義をしていた賀川豊彦の門をたたいたこともあった。当時、一橋YMCAで一緒だった梅野典平は、次のように語っている。

「知りあつてまもなく、大平君を賀川豊彦先生に紹介した。賀川先生の教会は当時京王線の松沢にあつたが、その日は府中の幼稚園で講話があつた。話は『山上の垂訓』だった。講話が終わつてから大平君を紹介し、二人で賀川先生を駅まで見送つた。

先生は改札を出てホームに達すると、暗闇の中で『大平くん』と彼の名を呼んだ。そして『お雑煮を食わずから正月にきたまえ』と、大きな声で彼に呼びかけられた。私の名でなく初めて会つた彼の名が呼ばれたことにジェラシーを感じたのか、先生の声が奇妙にはつきり耳の底に残っている。」（真鍋賢二著『私の見た大平正芳』）

梅野は、正芳とムーランルージュに行った仲でもある。金がなくて帰りは歩き、府中の刑務所あたりで、二人して大声で「わが罪を洗いて、雪よりも白くせよな」と讚美歌をうたつた。

また、正芳は、昭和九年四月に決定された一橋YMCA寮の建設のための募金活動にも参加した。

「私はこの寮には入寮しなかつたが、この建設のため趣意書をもって、関東、関西各地の諸先輩を歴訪行脚したものである。幸いに一万五千円程度の醸金の確保に成功し、国立の木立ちの中に二階建の寮ができ上つて、大堀さんという親切な

信心深い寮母さんを迎えることができた。」(『私の履歴書』)

その寮母の大堀シゲは、「大平さんは、ここで月一、二回、定期的に開かれていた聖書研究会に弁当持ちで必ず出席されました」と語っている。

正芳は一橋Y M C A寮の建設募金のような金集めの活動でも精力的な面を見せると同時に、人集めにもなかなかのアイデアを發揮した。

行政法の講義は東京帝国大学と兼任の美濃部達吉教授だったが、講義修了のとき、受講していたもの(五人)だけでお別れ会をやるのはもったいないと、大学の掲示板上に、「美濃部博士と昼食を共にする会」というポスターを貼ったところ、食堂に入り切れないくらいの学生が集まったという。

正芳が大学生活を送ったこの昭和十年前後は、日本軍の中国大陸への進出が着々と進み、やがて日中間の全面戦争にまで発展した時期であった。国内ではこれに呼応して、軍国主義化、戦時体制化が進行していた。だが、昭和初頭に破滅的な状態に陥っていた経済は、昭和六年の満州事変を契機に回復にむかい、輸出も増大し、重化学工業を中心に景気は活況を帯びつつあった。また文化の面でも、シャリアピンやケンプが来日し、芥川賞が創設され、築地小劇場が知識人を惹きつけるなど、新しい昭和文化が形成されはじめていた。川端康成の『雪国』や高見順の『故旧忘れ得べき』などのすぐれた作品もこの頃に発表された。

正芳たちは、大学生活の中で、こうした文化を楽しんだが、その期間はまたたく間に終わり、学生にとっては就職問題という最大の難関が近づいてきた。

「……心のどこかに『住友』に魅力を感じ、できれば住友にはいりたいという希望を持っていた。それというのも、子供のころから、住友鉱山の四阪島製錬所の煙を見ながら学校へ通っていたし、住友財閥の発祥の地、別子銅山には、郷里の村からもたくさんの方が働きに行っていた。私が涉獵したキリスト教関係の本の多くが、矢内原 黒崎(幸吉)、江原(万

里)の各先生のもので、そのいずれもが住友と縁のある方であった。また当時私は、川田順氏の和歌や随筆(とくに歴史物)が好きで、川田さんの二十数冊に及ぶ著書はほとんど読んでいた。その川田さんが住友の理事をしていたし、住友のことをよく書いておられたことなども、心理的に影響していたのかもしれない。(『私の履歴書』)

一方、この頃は、中央官庁が新卒者の採用にあたって、東京帝国大学出身の法学士偏重から経済学部出身者に目をむけてきた時期でもあり、経済の分野を得意とする商大の学生が官吏の道をめざして、高等文官試験の関門にチャレンジするようになっていた。

中学入学時に将来の志望を「官吏」と書いたことのある正芳は、自分の周辺で、上級生や仲間が高等文官試験を受ける様子を見て、おそらく心を動かしたのである。彼もこの試験を受験する志を立て、猛烈な勉強を開始した。

この時期に正芳が読んだと思われる書物の見返しには、次のような書込みが行われている。

我妻栄著『物権法』(岩波書店、昭和七年十一月二十日発行)には、「俺がしたことについては俺が責任を負ふのだ。誰にもはばかりまい」、「自分に鞭打ち……」(九年二月十二日)試験時間割発表の日、「寡黙、実行」、「素心一點」。

また、高田保馬著『経済原論』(日本評論社、昭和八年四月二十五日発行)には、「究めよ。今でなければ読めないかもしれないぞ。利害、愛憎、毀誉に煩はされず唯あるものは不思議な悦であり、恍惚たる悲壯の感激でなければ……」、「氣生於志奮於義 義苟失矣匹夫猶且侮之」、「力不足以維鷄、貌不足以加人、而活氣所發滿堂懼伏以秦王之暴不得少折其節」、同じこの本の末尾には、「第一回読了、昭和八年、第二回、昭和九年九月十七日(月)、第三回、同年十月四日(木)正午。秋の憂鬱な空がたれこめて、ものうい正午、一橋時代からの古鐘の錆びた音を耳にしつつ」という文字が見える。

また、正芳は、本の活字の横に線をひくだけでなく、一字一字に傍点をふる、あるいは丸や三角をつける、あるいは欄外に書きぬく、ノートにうつすなど、あらゆる手段を使って勉強した。その痕跡はいまも多くの書物に残されている。

三年に進級する昭和十年の春、中野の従兄大平秀雄が、駐在武官として中華民国へ赴任することになった。あとが夫人と子供だけになるので、正芳は国分寺の岡村家を引き払い、中野に移り住んで、ここを卒業までの勉強の場とすることに

した。勉強に疲れると、正芳は小学生だった秀雄の長男剛とキャッチボールをしたり、童謡の「七つの子」をつたったり、時にはその頃はやった東海林太郎の「赤城の子守唄」を口ずさんだりした。

その年の五月には、商法研究のためヨーロッパに留学していた米谷隆三教授が帰国して、正芳は前出の武野義治とともにその教えを受けた。

武野は言う。「法律関係から私、そして上田ゼミナルから大平さんがあずけられました。米谷先生は気骨のある学者で、大平さんも慕っておりました。どういつきっかけが忘れましたが、米谷先生が、ある日、大平さんを評して、『実に大人物だ』と言ったのを聞いたことがあります」。

高等文官試験を受けたのは、その年の九月、発表は十月で、正芳は行政科に二桁番で合格した。同期の合格者は、富樫総一（のち労働次官）、武野義治（前出）、小島太作（のちインド大使）、紙田千鶴雄（のち鉄道監督局財政課長）、岡本貞良（のち水産庁漁政部長）等である。

このとき、後輩の鷹尾寛らが中心になり、高松高商出身の後輩全部が集まって正芳の合格祝勝会を行ったが、その席上のあいさつで、正芳は「試験の答案は『薄化粧の女性』の如く謙虚に書くべきだ」と言った。あれも知っている、これも知っている」という具合に、「コテコテ書くと、結局化粧くすれで地肌が露出する」という意味である。「薄化粧にしる厚化粧にしる、大平さんは、そんなにたくさん女性を知っているんですか」と参加者の一人が聞いて、爆笑となった。正芳は卒業にあたって、この親睦会のメンバーを下宿に呼び、狭い部屋で鍋を二つ並べて、スキ焼をふるまった。

また彼は、卒業した年の八月に発行された高松高商の同窓会誌『又信』に、後輩の受験希望者にむけて、「高等試験断想」と題する小文を寄せているが、その中で、第一に、自分は官吏になるんだという意識を持つこと、第二に、経済科目を選んで自分の特長を伸ばすこと、第三に、日常経験を経済学の原則と関連して考える、いわば「生きた学問」をすることを強調している。

高等文官試験を通った正芳は、奨学資金を受けてきた鎌田育英会の鎌田勝太郎（当時貴族院議員）のところへ相談に行

き、その紹介で昭和十年十月頃、大蔵次官の津島寿一を訪ねた。

津島は、香川県坂出の人。一高、東大を卒業して、大蔵省に入り、エリート中のエリートとして若くして頭角をあらわした。海外駐劄財務官として活躍、理財局長から次官となり、このときは高橋是清蔵相に仕えていた。

正芳は、それまでも、松平頼寿伯爵（高松藩主松平頼聡の長男、当時貴族院議員）が香川県出身の学生を小石川の広壮な邸宅に招待したガーデンパーティーで津島と顔を合わせたり、また、津島が大蔵省財務官時代、大学に講演に来たとき、数人の香川出身の学生とともに津島と一緒に写真をとったりしたことにはあつたが、全く紹介なしで、就職を依頼するほど親しい関係ではなかつた。津島の秘書をしていた椎名佐喜夫（現アジア航測会長）の言によれば、このため、正芳は鎌田勝太郎に紹介の名刺をもらい、津島に会いに行つたのである。

正芳は、津島から然るべきところに紹介を頼むつもりでいた。

ところが津島は、突然、

「君、大蔵省にこい」と言った。

「こいと言われますが、取ってくれるでしょうか」

面くらつた正芳がそう言つた。

「本日はだいま、ここで採用してやる。ほかを受けないでよろしい」と津島は断言した。

椎名によると、正芳は、「しかし、私は東京商大ですから、大蔵省にはむかないのではありませんか」と言つたという。

津島は答えた。

「そんなことはない。大蔵省はいままで東大ばかりで、たまに京大が入るぐらいだ。どの事務官に何かを聞いても、返ってくる答はみんな同じだ。これではいかん。ちがつた血が必要だ。君、大蔵省に来たまえ」。

そういうわけで、正芳の大蔵省入りが決まつた。商大からは七年ぶりの入省である。

正芳は、早速郷里へ手紙をだして、家族のものに知らせた。それには「津島先生が会つてくれて、帰りには車までつけ

てもらった。天に昇るほどうれしかった」と書いてあったという。

おそらく津島大蔵次官に会った直後のことと思われるが、大学が就職あっせんについて、学生に提出を求めている「人物調」という用紙に、正芳は次のように記入している。

まず、「就職志望先」については、「第一志望、官庁、第二志望、特殊銀行」としている。もし大蔵省に入れなかった場合にも、「日銀」その他の半官的な機関に入りたいという希望が表されており、この時正芳ははつきりと「官」を志していたことがわかる。ちなみにこの「人物調」によれば、「身長」は「一六九釐」、「体重」は「六九匁」、「趣味」は「和楽、映画」である。（なお、この頃は映画文化の戦前における全盛期であり、邦画では『伊豆の踊子』、『滝の白糸』、『人生劇場』、『赤西蠣太』等、洋画では『会議は踊る』、『街の火』、『にんじん』、『未完成交響楽』等が相次いで封切られていた。正芳はその多くを観たことである。）「運動」は「テニス、陸上競技、ピンポン」、そして、「長所」は「快活ニシテ円満、質朴」とあるが、「短所」は「理智的判断ヨリモ感情ニオボレ易イ」と記されている。

これまで、折に触れ観察してきた正芳の性格という点からすると、この大学卒業時点での「感情ニオボレ易イ」という自評は、注目に値する。

正芳が「職分社会と同業組合」と題する卒業論文の執筆に着手したのは、高等文官試験が終わり、大蔵省入省も内定して、しばらくしてのことである。「国家試験を終へてからの十月、十一月は気分弛緩とテーマのとり方に煩はされて徒らに低迷を続け少しも渉らなかつた。十二月に入つて漸く倉皇として起草した」と、彼は論文の「小序」の末尾に記している。（『回想録』資料編参照）

この論文について宮沢健一（一橋大学学長）は、大平の死後一橋大学で行われた如水会主催の追悼会において、次のように述べた。

「……序文（小序）の中で語られているところがよみますと、上田先生のご指導で、トニーの『獲得社会』（The Acquisitive Society 1921）を読まれた時、当時 キリスト教に親しむ ようになっておられた大平総理は、中世の

聖トマス・アクィナスの政治経済哲学の現代版として、トニーを理解されました。そして曰く、「自由競争も階級闘争も、ともに社会を混乱に陥れて」いる現在、「この対立を止揚せる全体、分裂を克服する統一、闘争を超えた調和が要望されるのは、歴史の必然の歩み」であるとしています。そして同時に、現実的な関心として、……当時、世界各国で進展しつつあった産業統制の動向に着眼して、これを「国家と個人とを媒体する組織」として、組合としてとらえる見方を打ち出しておられます。……若きクリスチャンとして「個人の社会に対する正しい結びつき」に悩み、トニーを読むことによって、一方で思想的には、古く溯って聖トマス・アクィナスの世界にあそび、他方、現実的には、時代の問題としての同業組合の動向をとらえようとしたものと思われまます。そうした幅広い年代に及ぶバララマ的構想の中に、後年の、日本の指導者としての大平総理の哲学の発端、源流、ならびにそのお人柄の一端が、躍動しているのを感じます。」

この卒業論文が脱稿されたのは昭和十一年一月二十一日だったが、その一カ月後に、日本のその後の運命を大きく決した重大事件が発生した。二・二六事件である。

同期の露木清（のち伊勢丹会長）は書いている。

「二・二六事件の最中に大学最終試験を終えた後の一夕、次第に高まりゆく軍靴のひびきと言論の流れの歪みのうちに、底知れぬ不気味さを予知しつつ、少しでも自由な民主社会を保持し得るは、われわれを置いてなきものと彼我ともどもに語り合った。」（『回想録』追想編）

学士試験に合格した正芳の成績は、三年間で、「優」が二十六、「良」が七、「可」はゼロ。卒論の評点は「優」である。

正芳は、もはや、三年余り前、大阪の桃谷順天館につとめながら、友人に悶々たる手紙を送った彼ではなかった。聖書を通じてキリスト教への理解は深めていたにしても、布教運動に引きずりまわされる彼でもなくなっていた。大学において学問の深遠を学び、さまざま個性、さまざま出身背景の友人と接して友情を培い、また同時に大都会の混濁と活力に触れつつ、彼は社会への視野を広げていたのである。